昭和49年度　夏期研修会報告（A）

大自然のなかにはいって，生物学を究めるよろこびはたとえようもないほど大きい。恒例の夏期研修会のもつ意義と役割は年ごとにその価値を高めているが，ことしは，はじめての試みとして，県外での研修会を企画してみた。室井会長の指導と会員の協力で成功のうちにおえたことはよろこばしいことである。

A．富士竹類植物園コース

と　き　8月10日(土)～12日(月)

宿　泊　自然真道本部（御殿場市富士岡）

費　用　12,000円（宿泊費・貸切バス・見学料など）

参加者　27名

第1日　竹と笹

富士竹類植物園，北に富士，東南に箱根の山脈を望む雄大な裾野の小高い丘に案内された私どもは，邪念も世俗の悩みもふっきれるさわやかな気分に包まれるのであった。竹の葉ずれの音を聞き，竹の精に誘われるままに竹博士室井先生の話に酔う。立体的な竹林の美しさをひきたたせる芝生をひろくとったこころにくい設計である。くわしい内容については富士竹類植物園発行の報告書にゆずることにする。

第2日　サビタの花

山中湖，河口湖の雑踏を横にみて青木が原樹海調査に入る。本栖湖に出て，白糸の滝を経て冨士山の五合目へ走る。野外観察ドライヴである。ウラジロモミの原生林をつき抜けるのは快適だが，植物にとってはまさに公害である。立枯れが目だつ。フジマツの枝ぶりで風の方向や強さを考えながら，室井先生の名解説にききほれる。チモシー，カニコウモリ，コメツガ，トガ林，日本特産のノガリヤス，紫のシャジン，クルマユリがつぎつぎとあらわれては消え，またあらわれてはたのしませてくれる。富士山ゲートにはいって，ツルアジサイ，マタタビをみているうちに，メイゲツソウがあらわれた。名前の割には貧弱な花だが，バスを停めてカメラの放列をしく。場所によって赤味のおびかたがちがうのも風情がある。白花もまた野趣があって美しい。ぶらっとさがっているのはサワグルミ，黄色のキオンが車窓を走る。ブナからウラジロモミの林をぬけると海抜 1,600m，樹木が急に小さくなってくる。ハコネヒヨドリ，フジマツ，ハクサンオミナエシの黄，ムラサキケマンの紫，そして，サビタの花，哀愁をおびたこの花が旅情をさそうのか，原田康子の小説に魅せられてか，印象的な花であった。ムラサキサジキ，ニワトコ，ナナカマド，室井博士の解説はバスのスピードにあわせて，つぎからつぎへと飛びだしてくる。ヒロハヤマハハコの白さがひときわめだつ。トガ林を抜けると 2,000m，三合目にさしかかる。ナナカマドが紅葉しはじめている。5合目でバスを降りる。2時間余の自由行動，宝永火山口へいくもの，7合目までめざすもの，さまざまだが，一様に体験したのは，一天俄かにかき曇ったとおもうやの猛烈な豪雨である。雷雲がなかったのは幸いだった。サンダル履きの観光客のあわてふためく姿をみるにつけ，山への無礼も極まれりとおもう。

第3日　アサガオ

夏の早朝はさわやかである。芦ノ湖をまわって国立遺伝学研究所へ向う。森脇所長自らの歓迎をうけ，研究所の概要説明をきき，所内の見学にうつる。各担当の部長から専門的な解説をうける。イネの話はあらためて機会をもって勉強をしたいとおもう。アサガオの圃場は，世界各国の遺伝学者を感嘆させたという珍しい品種の勢揃いである。ネズミの研究棟では世界中のネズミととりくむ研究者の学識の深さに感銘をうけた。この遺伝学研究所は学者村である。しばらく滞在してじっくり見学させていただきたい気持ちにかられたのであった。

（県立夢野台高校　当津　　隆）